

『湯山の里』の風土記(その一)

恒松 栖

一、湯山集落における歴史的背景

(一) 湯山の位置や自然環境

大分県のほぼ中央に位置する別府は、東は波静かな別府湾に面して、西は鶴見岳・内山・伽藍岳などの鶴見連山に囲まれている。南は、立石山・向平山・高崎山に、北は、高平山・猫岩山・御越山などに囲まれた石垣原扇状地に立地している。

その中で湯山の里は別府地域の北西部に当たる高平山東方



湯山の里の位置

の丘陵地に位置している小さな集落である。地域の中央を曲がりくねって国道五〇〇号が東西に走っており、集落の東は別府湾に開ける高原台地であり、西は、高平山の嶺に囲ま

れている。交通機関での位置は、別府八湯の鉄輪温泉から明礬温泉を通り過ぎ、別府から長崎への高速道路を潜り抜け、再度高速道を渡ったところから始まり、集落の中心地を通り過ぎ、広大な草原の十文字原高原を一望するところまでである。

集落の発達起源は定かではないが、周辺地域には縄文及び弥生遺跡などが分布しており、古くから人々の生活が営まれていたことが想像される。

(二) 湯山を取り巻く古い遺跡

湯山を取り巻く地域には、十文字原高原や十文字原高原の東方に開ける通称扇山、地域内には冬ヶ城山などに古い遺跡が分布している。

① 十文字原第一・第二遺跡

十文字原第一遺跡は、別府から安心院方面に通じる国道五〇〇号線沿いであって、陸上自衛隊演習地の一部を占めている。東方に張り出した舌状台地の先端部付近の比較的平坦な地点に立地している。この台地は三日月台とも呼ばれている場所で、南側はなだらかな傾斜地であるが北側及び東側は急に落ち込んだ小谷を形成している。

遺跡は、主に縄文早期中葉に編年されたことが判明した(昭



十文字原第1遺跡の台地

和五七年県教委調査・現九州自動車道)。出土した遺物は、縄文早期の押し型文土器・石族・らく器・尖頭状石器・削り器のほか縄文後期、弥生式土器等であった。遺構は、集積遺構が六基得られたが保存状態は良好で、いわゆるアカホヤ下層のク



ロボクと呼ばれる黒色土層面で検出された。

十文字原第二遺跡は、遺跡としての存在の確認で調査を終了した（昭和五七年県教委）。

② 松の木台遺跡

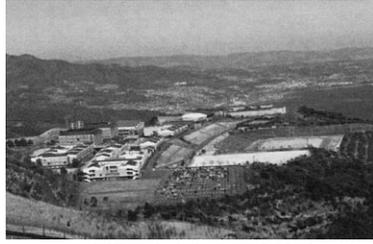
松の木台遺跡南区は、小谷を挟んだ台地に向かった位置に十文字原第一遺跡が立地している。わずかに轟式土器や無文土器が数点得られた。松の木台遺跡北区は、十文字原第一遺跡から北西側に五〇〇メートル離れた谷沿いの台地に立地している。

松の木台遺跡は、十文字原第一遺構と同様にアカホヤの下層より遺物が得られた。出土した土器は、手向け式土器で縄文早期終末期に編年されたものである。（昭和五五年から五七年にかけて県教委が高速道設置にともなって調査）。

③ 扇山遺跡

扇山遺跡は、火山性高原の一角を占める十文字原と通称扇山といわれる舌状台地に位置している。十文字原は、高平山火山と更新世中期の鹿鳴越火山や西の台流紋岩に挟まれた高平山扇状堆積物がこれを覆っている。

扇山遺跡は、以前から石器が表面採集されたことが知られていたが、正式な調査報告は平成三年度に石族が二点採集さ



発掘調査された扇山遺跡・遺跡の上に開学したAPU大学

れただけである。その他の遺構遺物は確認されなかった。（平成三年別府市教委調査・APU開学に伴う発掘調査）

上記十字原第一・第二遺跡、松の木台遺跡、扇山遺跡は、共に湯山地区に隣接しており古くから人々の生活にかかわりの深い遺跡であったことが推測される。また、湯山地区に位置し何かと湯山集落の人々の暮らしにかかわりの深いのが藤ヶ城遺跡であったことがわかる。

④ 藤ヶ城遺跡

湯山地区は、宇佐から別府へ通じる古い幹線道路（宇佐街道）に面している。宇佐から、佐田、大内ヶ平、能原、十字原、湯山、明礬、野口、別府の街並み、浜脇、高崎、府内へと続いていた。この官道の要塞として豊後国守大友家は、冬ヶ城山に藤ヶ城を創設し谷川美濃守という小家臣に守らせた。

この城は、藤ヶ城（冬ヶ城山にある城）あるいは宇土城と

も呼ばれたという。

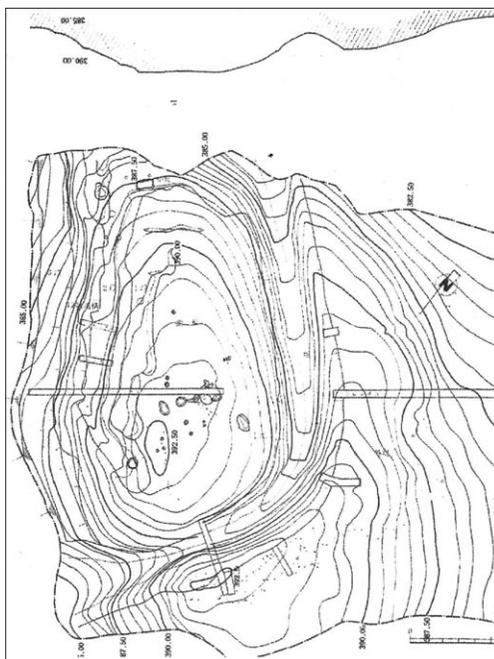
藤ヶ城遺跡は、九州横断自動車道の工事開始（湯布院〜別府〜大分）にもなつて昭和五六年度から発掘調査された。藤ヶ城遺跡は、中世室町時代の典型的な山城であるが規模も小さく確たる文献にも登場しない。いわば忘れられた山城である。

藤ヶ城遺跡は、別府から明礬温泉を経て国道五〇〇号沿いに北に進むと湯山地区に達する。湯山周辺には幾筋もの丘陵地が岩礁雪崩によって形成され、南東端は北鉄輪まで続く。その一つの標高三九二メートルの冬ヶ城山に位置するのが藤ヶ城遺跡である。冬ヶ城山は、東と南に開け別府湾を一望することができる。現在は、冬ヶ城山の中央を南北にオープンカットされ九州横断高速道が通過している。

遺跡は、表面観察で独立丘陵北東部の最高所を取り巻くL字状の堀及び北側斜面に段上のテラスを確認し、中世の小城郭と推定された。周辺には郭は存在せず北側は三段の壇上遺構によって囲む単核郭の小城郭施設があらわれた。壇上遺構・主郭・外堤上には室町時代を中心とする遺物群が撒布していた。また、城郭外に向かって南に緩やかな傾斜する傾斜面上に一箇所の焼き面を中心に平安時代の土器群が集中して



藤ヶ城発掘調査 写真



発掘調査区の地形図

※「若杉・十文字原・ふいが遺跡」県教委より転載

いる。城跡は一重の外堀と空堀を持つ単郭式の山砦であり構造としては極めて単純なものであるが空堀の規模も大きく、かつて速見郡内における重要な支城の一つであった可能性がうかがえる。ここでは、平安時代の土師器も出土しており山城の前史の遺物の存在も確認された。

藤ヶ城遺跡の眺望の良さや周辺の自然環境から大友氏の浜脇館をまじかに大分市上野の大友館や府内、さらに遠く佐賀関を遠望できる地位にある。豊前からの情報を大友氏の本拠に伝えるのに極めて適した位置に当たるとともに交通路の要所であったと推定される。

藤ヶ城遺跡全体から平安時代と室町時代と考えられる二群が検出されている。平安時代の出土は須恵器、土師器、黒色土器などであった。中世遺物は城郭各地区から出土した遺物の土師器で小皿と杯である。

藤ヶ城を守っていた谷川美濃守は、弘治三年（一五五三）大友宗麟が豊前への出陣を命じたところ命に従わなかったという事で矢田作十郎信孝を派遣して二月一六日滅ぼしたという。谷川美濃守の墓は藤ヶ城址の南下方の大溜池（地藏窪の池）の湖畔に祀られている。藤ヶ城は大友家の滅亡とともに廃城となったといわれる。

(三) 湯山地区の歴史

①湯山の地名の始まり

湯山の文字からわかりやすいように湯は温泉を意味すると考えられる。したがってこの地は山から温泉が湧き出ているという意味で名づけられたのであろう。今日でも数カ所から温泉噴気が立ち上がり温泉の豊かなところでもある。

近年の温泉ボーリングによって湧き出ているものもあるが古くから「地獄」という名称で付近一帯から自然体で温泉蒸気が噴出しているところや川岸から温泉が湧出しているところも数カ所分布している。岩地獄・谷の地獄やイオウ古敷・地獄平等などの地名も残されている。

②平湯立小野村の地名とのかかわり

鎌倉時代の弘安八年の『豊後国凶田帳』に平湯立小野村十町並鶴見加納大友兵庫入道殿の記録が残されている。このことから弘安八（西暦一二八五）年に平湯立小野村がどの地のことか指すのかが長い間不明で今日に至っている。

平湯立小野村は、室町時代に冬ヶ城山に藤ヶ城という山城があったことや農耕地の水田や畑地が分布している状態から湯山地区のことを指しているのではないかと説もある。

南好道氏の『湯山史考』によると「湯山地方は、火山活動

が造り出した火口丘で、有史以前から白色の亜硫酸ガスを濛々と噴出していた故、古くは竈戸山の中の平湯立小野村といわれた。平は先住民族が山の意味に用いた語で山から湯の立つという意味である。と記している。

『湯山の里』の著者である安部巖氏は、『豊後凶田帳』に記されている平湯立小野村は江戸時代末の文化四年（一八〇七）五月の脇蘭室という学者が残した『館海漁談』には「野田村湯山」と書かれていることから、何時から湯山と変わったのであろうか。と述べている。また、土屋公照氏は、『別府史談』二号に平湯立小野村について、平湯と小野村の二村が接しているかあるいは近い位置にあったのではないかと推測している。正確な位置比定はできないが平湯は野田村の枝村であった湯山辺りであろう。と推測している。

南好道（湯山分校教諭・郷土史家）、安部巖（文化財審議員・史談会役員）、土屋公照（文化財審議員・史談会役員）の各氏がともに指摘しているのは「平湯立小野村であったのがいつのころからか温泉の豊かな地として「湯山」と呼ばれるようになったのではないか」ということである。地域内の自然環境や古い墓碑の記名から推測して江戸時代以前に開かれた地であることは確かであろう。

(四) 十文字原高原の自然と歴史

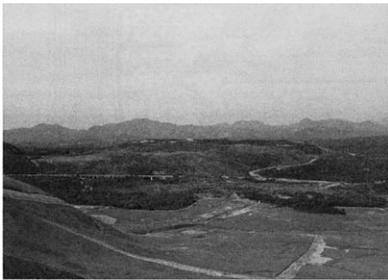
① 十文字原高原の自然

別府宇佐道と玖珠・塚原を経て十文字原をよぎって小浦に達する玖珠道の古い道との交差点が広大な十文字原のほぼ中央に位置している。鶴見連山の北端に当たる位置にある猫ヶ岩山（七十二メートル）の麓に広がるのが十文字原高原である。十文字原高原は、東は別府湾に開け、南に湯山高原・湯山集落が広がり、西は猫ヶ岳山・高平山・伽藍岳で、北西に鹿鳴越連山、天間草原、塚原高原がある。

この地は、十文字原第一・第二遺跡、松の木台遺跡、扇山遺跡などがあり古くから開かれた地である。高原の大部分は草原で四季の自然景観はこのほか美しく他に類の少ない地となっている。

② 十文字原の一軒家

古い宇佐道と森藩の久留島候の参勤道とが、交差していたことが「十文字原」の地名が残されたといわれている。その交差点に古くから一軒家があった。豊後から豊前へ行きかう人々や玖珠の地から山越えをして小浦までたどり着く人々にとって一軒家は何よりの休息地であったと思われる旅人から愛されていたことが伺える。



十文字原の一軒家の屋敷森・屋敷跡

広い草原のほぼ中央に住宅が存在していたが、屋敷は屋敷に囲まれており厳しい自然環境への備えはなされていたという。住宅の南には水田があり、北側には畑が広がっていた。一軒家に定住した時期は定かではないが、江戸時代からであろう。明治の二十年代には、

当主の農業を営むA家と国有林監視のB家、馬車による物資の輸送業のC家、牛馬の売買仲介業のD家の四軒が暮らしていた。昭和二年には、久留米市在住のN兄弟が農業を志し入植し、A家のすぐ北隣で原野の開拓を始めたが、厳しい自然環境によって将来の展望が開けないということで数年間で撤退したという古老の話もある。

昭和三二年自衛隊の演習地に十文字原一帯がなった時に離散して近くの集落に落ち着いたという。

今日は、演習地の中なので入ることはできないが、平成一九年に特別に許可を取り調査したところ、かつて居住していたA家の住宅の柱石の跡や小さな石垣、屋敷森であった樹木・泉水（小さな池）などが遺されていることが確認できた。また、住宅地の南東約三〇〇メートルに設けられていた水田跡地は、水路や田なりが確認できた。

③戦後の開拓団入植から自衛隊の演習地へ

戦後十文字原一帯は、国有地であることから連合軍の演習地として使用していた。昭和二五年六月、朝鮮動乱勃発とともに別府駐屯地も一時から空き状態となったが、九月から三ヶ月間第三師団が駐留した。兵員数の増大によって既設の兵舎では収容できず、キャンプ内の空き地や十文字原にもテント村ができ静かな高原もニュータウン並みの賑わいを呈したという。しかし、この師団も一月に朝鮮に向けて出動し、再び静けさを取り戻した。

期を同じくして、十文字原の一軒家の屋敷跡から一キロメートルほど西、天間草原に近い猫ヶ岩山の麓の草原に昭和二五年一〇月、埼玉県から一六戸入植し、昭和二七年には三四戸となった。昭和二九年九月十文字原開拓団が設立され、開発に従事した。組合員数は五五名を数え高原を広く開墾し

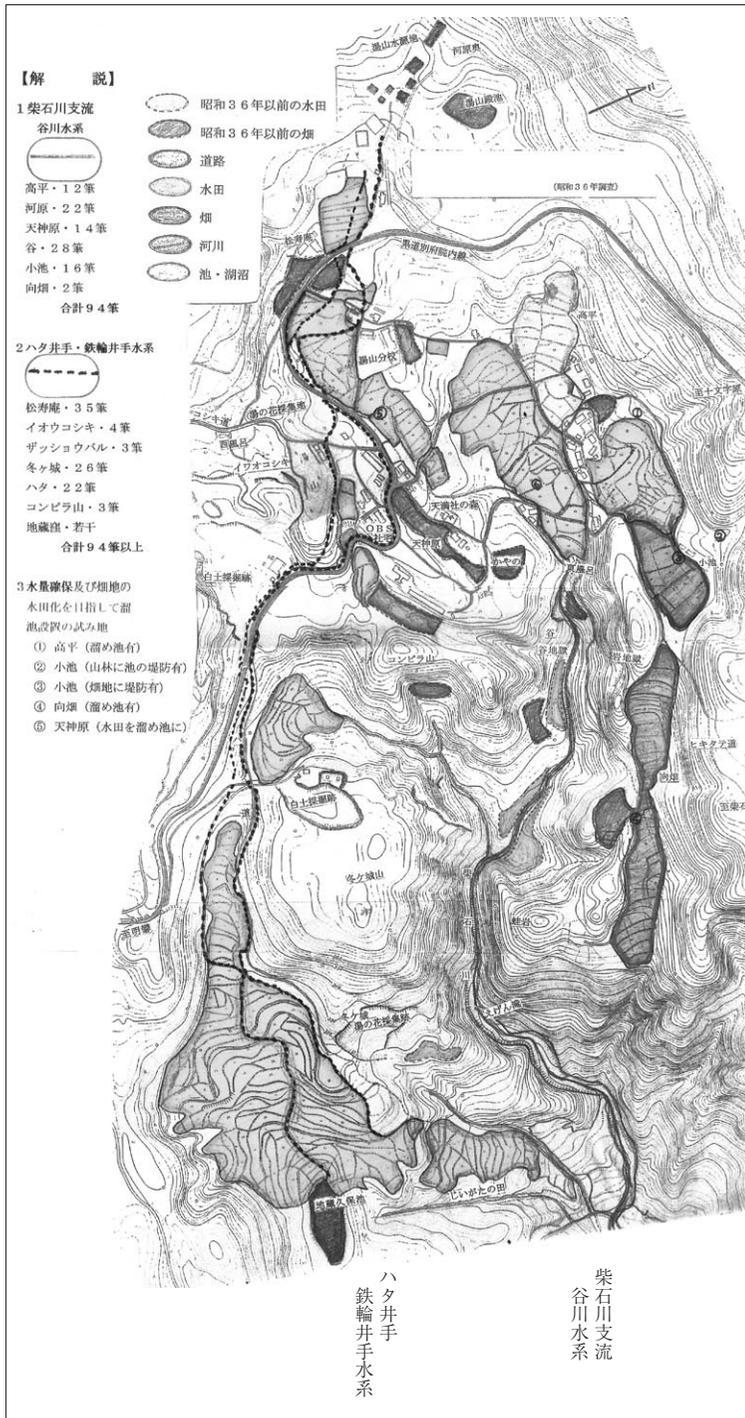
開拓地を広げた。

開拓地は火山灰土に覆われたクロボク土で地味がやせておりサツマイモやジャガイモといった根菜類と陸稲が中心となり、しかも水利の便もままならなかった。しかし、団員の願いは将来酪農を中心に開拓を広げたいという願いであったが、寒期の気候条件が厳しく、しかも交通の便の不便さなど過酷な条件で苦難の連続であった。

開拓民のたゆまぬ努力によって、開拓団としてやや明るさが見え始めた昭和三二年、自衛隊の演習地として使用するようになり、団員は各地に離散してしまった。団員は、一部別府市内に留まり扇山や日の丸荘の開拓地で苗木・植樹、肥育牛の飼育などに従事する人もいた。いずれにしても何とか開拓地の隆盛をと戦後の厳しい時代を生き抜いてきた人々であったが、県や国の施策によって志半ばにして離散することになったことは残念なことであり、湯山地域の人々にとっても重大な関心事であったことは確かである。

陸上自衛隊の演習地に転換されてからは、別府自衛隊の演習地として活用されており、総合火力・実弾射撃・ヘリコプターを交えた訓練などが行われている。全国に分布するおよそ六〇ヶ所の演習地のうち、県内には日出生台と十文字原の

湯山地区水田・畑耕作地分布図



(五) 湯山地区の棚田分布

二ヶ所となっている。十文字原の開拓団の入植は、湯山地区
にとって、行政区は異なっていたが（速見郡日出町に属す）、
入会権の所在する十文字原の位置であること、根菜類や陸稲

の栽培、薪炭の生産などでも近隣地の先輩として指導的な役
割を担っていた。また、湯山には分校ながら小学校があった
ために児童の通学も見られたようである。

湯山地区は、行政区として別府市亀川の野田村の枝村に当たる。明治一八年の『豊後国速見郡村誌』によると「野田村、本村古ヨリ本郡鶴見郷ニ属シ古来分合ナシ。東ハ亀川村ト耕地山林ヲ以テ界シ、西ハ南畑村ニ字二ノ戸ノ原野ヲ以テ接シ、南ハ鉄輪村ト耕地原野等ヲ以テ犬身相交リ、北ハ内竈門村ニ耕地山野ヲ以テ界トス」。幅員、東西一里四町、南北拾町。となつてゐる。地勢は西方原野を負い東南北の三面は全く耕地山林を連ね運輸が不便といへども薪炭之叱らず。戸数八一戸、人数男一九五口、女二〇一口、総計三九六口となつてゐる。湯山地区は、野田村の枝村であつて、村の一部に過ぎないが、昭和三六年の調査によると別図のように耕作地（水田・畑地）が分布してゐる。

柴石川の支流域に耕地や住宅が分布しており、河川の流域に沿つて棚田が形作られてゐる。水田耕作地の棚田を水系別にみると下記のとおりである。

柴石川支流の谷川水系では、字高平・一二筆、河原・二二筆、天神原・一四筆、小池・一六筆、向畑・二筆の合計九四筆で、水田耕作者は一八名である。

ハタ井手・鉄輪井手水系では、松寿庵・三五筆、イオウコシキ・四筆、ザツシヨウ原・三筆、冬ヶ城・二六筆、ハタ・

二二筆、コンピラ山・三筆、地藏窪・若干、合計九四筆以上で、水田耕作者は二八名である。

湯山地区の棚田分布の状況は、谷川水系とハタ・鉄輪井手水系との二つに分かれて分布しているが、総合計で一九〇筆にも及んでいる。別府市内では内成の棚田や内竈の棚田、東別府の河内の棚田などがあるが、それらにも匹敵するほどの棚田が分布していたことがわかる。しかし、水田耕作地の継承の重要さの認識や農業従事者の高齢化による水田耕作の人手不足、過重労働、経済生産性の低下、害獣被害の増大などの課題が多く昭和四〇年代から徐々に耕作放棄地と化してしまひ、昭和二〇年代の水田耕作の景観は見られなくなった。

参考文献

- 『湯山史考』南 好道著 昭和二四年
- 『湯山の里』（観光と史料）安部 巖著 昭和三五年
- 『湯山の里風土記』恒松 栖著 平成二五年
- 『別府史談』第二号他
- 『若杉・十文字原・ふいが城遺跡』県教委 平成二年
- 『豊後御越町志』御越町 明治三五年
- 『湯山一五字土地台帳』恒松助之丞 昭和二年
- 『別府風土記』恒松 栖著 平成一二年他